

題 地域づくりと一体となった森づくり「勉強会」へ

2022. 5. 30 山本薫久

2000年東海豪雨災害。豊田スタジアム周辺を水浸しにし、あと少しで都心部にも洪水危機がせまった。手入れされていない人工林の保水能力は乏しくあちらこちらの山で山抜けが発生、矢作ダムは流木で覆われ、ダム崩壊は免れたものの小渡小学校と保育園が水没し土砂で埋まり、各地で甚大な被害がでた。災害の原因である手入れされていない人工林の問題があらわになった。

2005年の広域合併により7割の森林をもつ豊田市となり、森林課の創設、大字ごとの山主さんが結集した「地域森づくり会議」の立ち上げ「森林の団地化」。公費100%による間伐推進。とよた森林学校開催、市民の「森の健康診断」の毎年実施、森林ボランティア団体が雨後の筍のようにつくられてきた。それから17年。動きによる地域差はあるものの大きく前進しつつある。

先進地では、森林課の支援により人工林の間伐がある程度すすんだ。しかし「森林と暮らし」の視点からは課題もある。家屋や田畑に覆いかぶさる天然林や竹林対応は森林課の「守備範囲外」である。少子高齢化で働き手が減少する中でこれらにどう対応するのか。そんな中、画期的にも森林課森づくり担当は「地域づくりと一体となった持続可能な森づくりを模索する取組み」を提起。行政の縦割り対応を超え、まさに地域住民の立場に立った「ワンストップ」模索の施策政策提起だと受け止めている。行政まかせにはならない。住民、市民も、学者たちも知恵を出し汗をかいて「森林と暮らし」を考えていくべきだ。

とよた森林学校では、「地域の森・健康診断」として旭地区押井町の森で実際に調査と見学を通し地域づくりと森林保全の新しいあり方を考える。5月29日(日)と7月23日(土)。地域にかかわる住民、行政関係者、森林ボランティア、学識者の参加が望まれる。検索によって「サイト」で申し込んでほしい。問合せ 090・5453・6411 山本へ。



写真 とよた森林学校「地域の森・健康診断」講座の下見相談会。旭の押井町「普賢院」に山主、森林ボランティア、自然観察リーダーたち。

題 地域づくりと一体となった森づくり

2022. 6. 7 山本薫久

「子供の時、山の高さは半分だったので家にも田んぼにも十分に太陽の光があたっていたが…。」

旭地区の山間地にある後藤さんのご自宅から南側の眼下には何枚もの田んぼが連なっている。その南に山がある。杉の人工林だ。杉がどんどん成長して「山の高さ」が倍になってしまったのだ。このままでは田も家も日陰になり、稲の成長や暮らしにも影響する。日陰になった田は耕作放棄地となり、日陰になった家には人が住まなくなる。山間地にはそんな例がたくさんある。深刻である。

杉の山の手入れはされているのだ。後藤さんは地域森づくり会議のメンバーであり、豊田市の支援を受けて森林組合が適切に間伐してくれているのをよく知っている。感謝もしている。しかし、その支援は杉の人工林が適正に保全されるためのものであり、田や家に光を適正に当たるようにするためのもの

のではない。ここに問題と課題がある。



豊田市森林課も手をこまねているわけではない。人工林保全では先進的な施策を推進してきたし全国から注目もされている。新しい問題と課題にも気づいている。だから、森林課森づくり担当は「地域づくりと一体となった持続可能な森づくりを模索する取組み」を提起した。画期的だ。

市民も無関心であってはならない。明治用水の取水口で起きた事故が示すように、工業も農業もすべての産業を支え暮らしを支えているのは「水」であった。水の枯渇ばかりでなく洪水も防がなくてはいけない。その水を適正に「使える水」として供給しているのは森林と山間地での人の営みであることを忘れてはいけない。

とよた森林学校では「地域の森・健康診断」講座として市民参加型でこの問題と課題に焦点をあてている。7月23日に「地域の森を考えよう」では東大の蔵治教授、主任講師の北岡明彦氏、森林課森づくり担当者の講演とフィールドワークで議論を深める。問合せ 090-5453-6411 山本へ。



題 地域の森・健康診断 「地域づくりと一体となった森づくり」の探求

2022. 7. 30 山本薫久

「分からないことが多い」と思い至るのは、誠の実践者だ。何もするつもりがないか理解や関心の浅い者ほど分かったつもりでいる。

豊田市の全面積の7割をしめる広大な森林の保全では、森づくり条例を定め、100年の森構想を打ち出し、地域森づくり会議を津々浦々立ち上げ実践を重ねてきた。もう15年以上着実に成果をあげてきた。全国に誇ることができる。でも、分からないことがいっぱいなのだ。いや、真摯に実践してきたが故に、課題意識、未解明へのチャレンジがある。

とよた森林学校の新講座「地域の森・健康診断」は、地域森づくり会議の先進地といわれる押井町(旭地区)で、初心に帰り何が課題なのかをみんなで調べ、考え、話し合った。地元山主たち、森林ボランティア、森林観察リーダー、森林課小山森づくり担当、蔵治東大教授、北岡フィールドワーカー、50人が集まり人工林と天然林と田んぼや集落の現場に足を運び、気づきと学びを重ねた。

そしていくつかの課題が浮かび上がってきた。蔵治先生の提起をアレンジしていくつか列記する。

- ① スギ、ヒノキ、広葉樹の巨木化。田んぼや民家が日陰になる。いつ民家や道路、電線に倒れてくるかわからない。現在、公費による支援など公的施策はない。「自己責任」で解決するか？

- ② 災害リスク。どんな森なら風倒、雪害がないのか。大雨による沢抜けが防げるのか。安全で公益的機能発揮できる「針広混交林」の姿は？あるいは小面積皆伐による天然林化は？
- ③ 田んぼに水を引く用水の水不足が深刻。森林の成長は人が使う水を奪っているのか？どんな森がふさわしいのか？
- ④ 地域の森づくりは、地域の山主だけの権利と責任か？地域に通う森林ボランティア、その地域につながる関係市民、知見のある学者やフィールドワーカーも仲間にできないのか？

来年もぜひこの講座を継続したい。未来のため。

参加者からの感想をいくつか紹介する。

「私達の祖父母が植林し残した人工林を健全な形で次の世代に渡すために今私達がやらなければならないことを押井町以外の人たちと共に考える機会をいただきありがとうございました。山主一人の力には限界があり、いかに他の人の力を借りるかアイデアをいただきました。それもまた一人ではできないことでありますが、大変参考になりました。」

「北岡先生の森林に対する熱い想いに感動しました。今後少しでも何かお役に立てること、コツコツとやっていきたいと思いました。蔵治先生のお話をもっと聞きたかったです。」

「蔵治先生のお話しがとてもよかったです。60分くらい聞きたかった。北岡先生、小山さん、みなさんの意見、それぞれ大変勉強になりました。」

「最初から最後の鈴木(辰吉)さんのまとめまで大変関心をもって参加させていただきました。皆さんの行動力尊敬いたします。自分も森との関わり方を考えていきたいです。」



参加者、スタッフ 全員が考えたことを出し合い話し合った。全体ディスカッションも白熱！

